

顔形や容姿ではなく

奨励	深田 未来生 [ふかだ・みきお]
奨励者紹介	同志社大学名誉教授

サムエルはラマに行き、サウルはギバアの自分の家に向かった。サムエルは死ぬ日まで、再びサウルに会おうとせず、サウルのことを嘆いた。主はサウルを、イスラエルの上に王として立てたことを悔いられた。

主はサムエルに言われた。「いつまであなたは、サウルのことを嘆くのか。わたしは、イスラエルを治める王位から彼を退けた。角に油を満して出かせなさい。あなたをベツレヘムのエッサイのもとに遣わそう。わたしはその息子たちの中に、王となるべき者を見いだした。」サムエルは言った。「どうしてわたしが行けましょうか。サウルが聞けばわたしを殺すでしょう。」主は言われた。「若い雌牛を引いて行き、『主にいけにえをささげるために来ました』と言い、いけにえをささげるときになったら、エッサイを招きなさい。なすべきことは、そのときわたしが告げる。あなたは、わたしがそれと告げる者に油を注ぎなさい。」サムエルは主が命じられたとおりにした。彼がベツレヘムに着くと、町の長老は不安げに出迎えて、尋ねた。「おいでくださったのは、平和なことのためでしょうか。」「平和なことです。主にいけにえをささげにきました。身を清めて、いけにえの会食と一緒に来てください。」

サムエルはエッサイとその息子たちに身を清めさせ、いけにえの会食に彼らを招いた。彼らがやって来ると、サムエルはエリアブに目を留め、彼こそ主の前に油を注がれる者だ、と思った。しかし、主はサムエルに言われた。「容姿や背の高さに目を向けるな。わたしは彼を退ける。人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る。」エッサイはアビナダブを呼び、サムエルの前を通らせた。サムエルは言った。「この者を主はお選びにならない。」エッサイは次に、シャンマを通らせた。サムエルは言った。「この者を主はお選びにならない。」エッサイは七人の息子にサムエルの前を通らせたが、サムエルは彼に言った。「主はこれらの者をお選びにならない。」サムエルはエッサイに尋ねた。「あなたの息子はこれだけでですか。」「末の子が残っていますが、今、羊の番をしています」とエッサイが答えると、サムエルは言った。「人をやって、彼を連れて来させてください。その子がここに来ないうちは、食卓には着きません。」エッサイは人をやって、その子を連れて来させた。彼は血色が良く、目は美しく、姿も立派であった。主は言われた。「立って彼に油を注ぎなさい。これがその人だ。」サムエルは油の入った角を取り出し、兄弟たちの中で彼に油を注いだ。その日以来、主の霊が激しくダビデに降るようになった。サムエルは立ってラマに帰った。

(サムエル記上 15章34節―16章13節)

見えるものへのこだわり

今年6月のことでした。アメリカの新聞やテレビがトップニュース的に扱った奇妙な出来事がありました。ワシントン州北東にあるスポーケン市の全米黒人地位向上協会、通常NAACP (National Association for the Advancement of Colored People) と呼ばれる歴史的にも極めて重要な人権擁護団体に関する報道でした。支部長を務める37歳のレイチェル・ドレザルさんは色白の女性ではあるけれども、「自分はアフリカ系アメリカ人である」と公言して活動していたが、実際は純粋の白人であるというのが報道の内容でした。私は読みながら「それでどうしたの?」とそのニュースの理解に苦しむ反応を感じたのです。この団体の会員になるのには人種は問われないのだし、アフリカ系アメリカ人の中にはほとんど「白人」と呼ばれている人と表面上あまり変わらない人々もいるのですから、私のいささか冷たい反応は不思議だったとは思えません。アフリカ系アメリカ人の間では昔から、できるだけ「白人」に近く自分を見せる傾向が強くなり、化粧品会社などはこの傾向を利用して相当な利益を上げていた時代がありました。きつとレイチェルが自分の人種的背景を偽っていたことに問題があったのでしょうか、これだけ大騒ぎすることではないと私は感じたのです。

その頃、朝日新聞に掲載された一文がある人の口サンジェルスへ出張中の体験に触れていました。タクシーに乗ると運転手が話しかけてきて「あなたは中国人か、それともベトナム人かな」と尋ねたそうです。「日本人だ」と答えると運転手は笑いながら「私はマケドニアからの移民だが、アジア系の人は皆同じに見えるのです。私にとっては顔が一つしかないようなものです」と答えたそうです。記事は続きます。「一瞬、ずいぶん言いようだと思ったが、私もマケドニア人とアルバニア人の違いが分かるかと言われても分からないから、確かにお互い様だ」と書いていました。何かこの筆者は中国人やベトナム人と間違えられて、少々気分を害していたように私には感じられたのです。

顔形や容姿にこだわる傾向はどこにでもあるでしょうが、日本の場合はそれがしばしば排他的な眼差しや価値観を生み出します。ミス・ユニバース・ジャパンの優勝者が、史上初めて、いわゆる「ハーフ」の女性だったことが必ずしも肯定的に受け止められなかったことが新聞に載ったのも6月頃でした。生まれも育ちも国籍（現在二重国籍ですが）も日本なのに父がアフリカ系アメリカ人であるというだけで「本物の日本人じゃない」と批判を受けたことは、くだらないことだと笑い流すわけにはいかないと私は考えたのです。大体「ハーフ」という言葉そのものが奇妙だとも思うのです。

見えるもの・見えないもの

聖書は見えるものではなく、見えないものを強調します。

聖書が主張する神への信仰についてヘブライ人への手紙の著者は「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認すること」（11章1節）と書いています。テモテへの手紙は1章に「永遠の王、不滅で目に見えない唯一の神に、誉れと栄光が世々限りなくありますように」（1章17節）という言葉が記されています。目に見えるものに価値がないというのではなく、見えないものの尊さを忘れない大切さが強調されているのです。

人間は顔形や容姿といった直接肉眼で捉えることのできることに支配されやすい存在です。しかしそれが良いとか悪いとか、目に映るあるものが綺麗だとかそうではないとかいった直感的判断は、もって生まれた感性によるよりは、生まれ育った環境に支配され、そこから影響を受ける方が強いのです。そしてこの判断はしばしば一生付いて回ることも珍しくありません。このパターンが心の動きにおいても影響することにあまり気がつかないことも、珍しいことではありません。

聖書に見いだす一例

目で見ることのできる顔や容姿に振り回されているのは、物事の真髄を捉えることは困難だということを示しているのが、今日読んだ聖書の物語です。少年ダビデがサウル王の跡継ぎとして預言者サムエルによって選ばれた話です。この少年はベツレヘムのユダ族の間では庶民とは言えない、豊かな伝統をもつ家族に属していました。彼はエッサイという人の末っ子で野原で、羊を飼うという仕事に従事していました。王はサウル。しばしば権力者が辿る道で陥る墮落の横道へとサウルも逸れていきます。失望と怒りの中で神は預言者サムエルに語りかけるのです。「サウルをイスラエルの王として立てたのは失敗だった。新しい王を探そう」と。サウルはまだ権力の座にあるわけですからこの使命は危険です。しかし神の命は具体的であり、預言者サムエルはこれに従い、ベツレヘムのエッサイの所へ出かけていきます。エッサイはこの大物預言者の訪問に緊張して、野原で働いている末っ子ダビデを除いた7人の息子たちに、身を清め、いけにえの会食に参加するようにと命じます。サムエルはこの息子たちの中から次の王になる男を選び出す任務を負っています。サムエル自身たならぬ重い気持ちを抱えていたかもしれませんが、それもあってか、彼の判断は早い。まず目を止めたのがエリアブ。サムエルはすぐ「この青年だ」と即断するのです。すると、神の声が聞こえる。「容姿や背の高さに目を向けるな」と。警告の言葉です。さらに言葉が続きます。「私は人が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、私は心によって見る」。相当厳しい声です。

次にアビナダブ、そしてシャンマ。7人の恰好いい青年たちが次々とサムエルに会い、退室していく。サムエルは奇立ったに違いありません。「これだけか?」きつとサムエルの声は細くなっていったかもしれません。父親、エッサイが答えます。「末っ子がいるのですが、まだ『ガキ』のようなもので野原で羊を飼っています。ここでもエッサイの反応は早かったのです。「呼んでこい」。きつとサムエルの声には一抹の投げやりなトーンがあったかもしれません。「その子が来ないうちは食卓にはつかないぞ」。速やかに野原から少年ダビデが呼ばれます。シャワーなど浴びている時間の余裕はありません。サムエルはこの少年をどう見たか。「彼は血色が良く、目は美しく、姿も立派」であったと著者は記しています。困ったことです。つい先ほどサムエルに神が語りかけた言葉はどうなったのでしょうか。

「容姿や背の高さに目を向けるな。私は人が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、私は心によって見る」。

もうすでにこの時点で神の眼差しと人間の視点の間にはずれが生まれていました。それでも神には神の計画があったのでしよう。「立って彼に油を注ぎなさい。これがその人だ」との声がサムエルに届きます。その日以来、主の霊が（息吹が）激しくダビデに降るようになったと記されています。

この男ダビデは、イスラエルの歴史においてずば抜けた大物になりますが、人間的弱さも多くあり、挫折し、煩悶し、時には神を裏切って涙する王でもありました。しかしまた、繰り返し神の許しを請い、新たにされて神の僕として立ちあがる人でもあったのです。彼が歌ったとされる詩は詩編に含まれ今も広く愛され、歌われ、人々の心を潤しています。興味深いのは聖書に描き出されるダビデ王の高く評価される「業績」には、若き日に人の目を引いた血色の良さ、目の美しさ、立派な姿は全く意味をなさなかったが如くに一切触れられていないことです。神が「自分は人が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、私は心によって見る」とサムエルに語った言葉を証明するような神の姿を、私たちは見てとることができるのです。

今日生きる私たちも

ダビデが王となる候補者としてサムエルによって選ばれたこの物語は、神の意思が動く時、神の選びが実現する時、それはしばしば人間には理解できない自由さと、不思議に満ちた形をとることを示しています。それが重大な事柄であればある程、人間の目には見えない力が動き、人間が考える方法や価値観からはかけ離れた出来事として起こることを、私たちは

心に秘めて日々自分と、そして隣人の命を育みながら生きていきたいと私は願うのです。表面に見えるものに支配されず、顔形や容姿にこだわることなく、神の眼差しを心に描きながら目に見えないものを捉えようとする生き方です。

2015年10月28日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録